



五
明
句
稿





五
明
句
稿



五明句稿

升屋柳雨輯

明和四年以前

境垣の内へ宮居して祭らるゝに
 家例の富突あり一筵に招かれて
 萬橋樓主へよろこびを述るとて
 初午の一番富や藏の鍵
 苗代に一枚古き簾かな
 二三尺這うて田螺の日暮れけり
 平澤にて
 ほつこりと磯山陰の櫻かな
 卑姓を憐む
 槍持の獨戻るや花の晝
 傘提て櫻に一人二人哉

五明句稿

十三卷

四號附録

一

百千鳥鳴くや佛の臂枕

洛の建仁寺へまゐりて

閑古鳥鳴くや伽藍の石ばかり
 獨行く男なぶるや麥の秋
 萍の花のあはれや杭の先
 祇園鳥居のわたりに百合といへ
 る女あり物書き歌よみて世のた
 つきとす雨の日尋ね侍るに今日
 は伏屋にと人の申す程に猶訪ひ
 行きて

姫百合や雨にかくるゝ藪の中

八橋神明奉納

麻畑の草々取るや朝清め
 脱き捨てし土水火風のアハセモ
 ノ父幹齋居士の辭世也其一周忌
 五月營み侍るに

脱き捨てし袷なつかし五月雨
 白鳥の飛んで明るし五月雨

泉河原にて

川涼し後の山の暮るゝ時
林鐘雨日の晴れ間紅山の舊莊を
尋ねて

樹々老いぬさればや夏を忘れ水

二兄の遠忌野莊にていとなみ侍

りしに

煮冷しや同じ鳥の瓜茄子

老いたる母の手箱より取り出て

給はりける時

臍の緒の年號古し土用干

蟲鳴くや我が宿ながら草枕

竹裡亭あれ果てゝ

菌生えて手の付けられぬ屋敷哉

雨晴れや坊主合羽に鳴く鶉

稻妻や壁に動かぬきりくす

或和尚菊好ませらるを訪うて

六尺の麥藁笠や菊の花

鐵の棒突くや鞍馬の花の中

明方の眼蓋冷たし山櫻

かき鯛の膾葉にもる牡丹哉

蚊遣火に粽の売の行方哉

百姓のほしかる水に螢かな

涼しさや人なき方の水馬

沾宗を止められし百雪のぬしへ

鶴の脛さすりて寝せよ花薄

粟の穂の折るゝばかりや鳴く鶉

瘦黍の節々折れて秋暮れぬ

目の覺て物着る秋の初め哉

秋風や根の離れたる雲の峯

明かゝる川風辛し橋の霜

鴛鴦の後に長し水の皺

病中

寝られねばいろく〜に聞く時雨哉

明和五年

馬蠅の人をめくるや磯の月

日頃行き交ひ見るに夫をそれと
も思はざりけるに此頃兄之に別
れ侍りて浮世の果敢なき事を思
ふ

朝の雪石屋の石を宿り哉

油打つ音か落葉か菴の窓

瘦馬の霜しはぶくや枯尾花

片よりて芥流すや鳴二つ

麥蒔とおろかに見たり山の腰

越後の水驛にて

足の出る蒲團に聞くや小夜衛

明和四年

髪結うて賣に出たる若菜哉

野の梅の目先に見るや電

紅梅に汐風よける簀垣哉

源氏繪の入らぬ處を霞かな

高橋氏樓上に遊ぶ吟

遠山は梢に寒し梅の花

山傳ひして泉の宜祥菴に出づる

時

鶯や雪間陽炎ふ笹の中

一日狩りくらし

分け歩行く花の枝折や瀧の音

物足らぬ袂の底や更衣

夕立や此頃聞かぬ墓の聲

夕立や寺からあまる御大名

涼しさや洗ひ膾に紫蘇二た葉

菊地元俊莊醫身まかり申されし

を悼みて

葛水に淋しき匙の光り哉

去年の夏回祿のために死せし人

の手向とて隣る人の一燈を照ら

すに猶世にありける俤のまのあ

たりに見る計り成りける中にも

花城の親子こそ思ひ出られて
猶悲し柱生しき高燈籠
稻妻や入江の船の高調子

金光寺野に妻をなくさめて

長き野や桔梗鳴らしつ萩折りつ

能代

住吉の神や此の津の音頭取り

これより末の浦端をすべて外ヶ

濱といふとかや

秋風や岩吹き飛ばす外ヶ濱

温湯

鶴鶴も浴びて上るや法の場

名月や大百姓の脊戸の川

我生にともなはれて百澤一見山

門にて

月を見る此棧敷や五百人

快晴なる日田中村の端れに煙草

の火貰うて

明和六年より安永元年まで

誰々も正月顔になりにけり

雪ざれの山家の軒の梅の花

鴻や胸さし出して春の畦

鐵砲の玉に掘らるゝ菫哉

全良寺にて

風よけの木のみ聲して冬籠

て

老母が別業にありけるにまゐり

安永二年

成田氏明市か奇南をめぐまれけ

るに

一炷の香に浮く花の座敷哉

引明かた蚶満寺へ詣てゝ翁の牌

を拜す

塚苔むして石に花咲く菫哉

春もまだ蜆小さし薄氷

雀子の身をふるはすや親の聲

掃溜に大根の花のつれなさよ

猫も出て櫻に遊ぶ月夜かな

龍の玉掴む牡丹の荅かな

水一荷上げる二階や杜若

幹齋居士追善

鶯の経をば知らて行々子

富士上野團十郎や初鯉

髪先にはさむ菖蒲や身の祝ひ

賤の子の馬押しかけて覆盆子哉

樹々深し石に音する花の露
花盛り雪駄すらして歩行きけり
目の前に牡丹の花の散りにけり
牽き入れて馬と涼むや川の中
人影や清水に沈むさゞれ蟹
日は花の中より暮るゝ木槿哉
横さまに鳥の飛ぶや秋の風
秋もはや一節白き木賊かな
木兎のつくゝと淋し焮の暮
奴婢かたづいて家持ちたると聞
さて
轉び合うて一つになるや芋の露
海濱夜泊
衣擣つや沖の漁火曇りけり
誰も來ず積ては崩す炭火哉
日の暮に茶の花提げて戻りけり
子供等と師走遊ぶや角力取

短夜や小豆煮えず鶏の聲
酒もなく女中も見えず蓮の花
伯父風之君一周忌追悼

はやさびぬ一秋草の花
萱の穂をほらけらかすや秋の風
身をむしる獨角力や秋の風
白葡萄幾露霜の滴りぞ
物かけへ廻れば寒き紅葉哉

百泉亭

木枯にからかね青し帘
僧達と夜更けて歸る途中の吟
風呂敷をかぶれば雪の達磨哉
さまにくく空降りかはる十夜哉

訪藪醫

物申すに内儀出らるゝ寒さ哉
震るゝや雫のつたふ牛の頤
寒菊や隙に成たる糍粩瓶
木枯や江に吹き落とす星の影

瓶隠子より杜若をめぐまれば

を瓶に生け置き侍るに一と日二

た日過て又新たに花の綻べるに
乙咲の花小式部のかほよ哉
夏川や日脚さし込む蟹の穴
玉水の蓮葉走るそよき哉
秣干すいされの中にななる哉
夕立や留木押切る早瀬川

新居

引き結ぶ蚊屋の釣手や土用干
砂畑や刈葱寝せゆく日の匂ひ
ひか／＼と浅井の底の砂涼し
松脂のなたれて暑し枝の折れ
濁しては澄むを見て居る清水哉
村口や蝙蝠まじり夕乙鳥
稻妻や蜉蝣流るゝ水の上
故壘野花開
犬蓼や田もなき里の秋の風

吹晒て鳥叫ぶ夜の月白し
鮫鱈のなまけし形や寒の雨
師走二十一日古四王の宮へ詣て

北向の社嚴き氷かな

安永三年

國の御守の野莊へ入らせらるべ
きよし聞え侍りければ

敷きならず砂や梅ある處まで
野の梅にさしかゝりけり月の暈
誰ぞや來ぬ椿の花の落ちたるは
寝轉べば寒うなりけり山櫻
一廬に膝を容るゝ日

蜘蛛の子の身ほどに家を作りけり

五月五日沙明亭の神樂あがみて

注連あやめ神の宿りや諸戦き
五月雨や障子を廻る蚊蜻蛉

さぼてんよ汝秋風を知るや否

さりとくす鳴くや二瀬の別れ鳥

霧の外や蜻蛉群るゝ旭かけ
海赤く野分吹き入る烟かな
豆刈らぬ片そけ山や鳴く鶉
菜萁原や虹立つ中に鳴く鶉
蒲の穂や長き短き秋の風

簷峰下鹿群

山陰や稗売嘗る脊戸の鹿
瀬に立て鹿潮ふるふ夜明哉

餞北海房

桃喰らへ再び共に月を見ん

旅行之吟 六句

道ばたに鶉出て居る朝哉
鳴は物かはつく／＼ほうし澤の秋
露深し菌に迂る山の腰
秋風の石に碎くる峠哉
馬買ひよいざこと問はん奥の秋

雨叩く蕨根寒し澤の秋
 妻うしなへる人に申し送る
 露霜や聲鳴さかれて片鶉
 降る中へ降り込む音や小夜時雨
 磯川や袂時雨るゝ小鰕取り
 世を鶴と冬籠りなば此あたり
 落葉焼く中の句ひや枳^{けんぼなし}棋
 日のかする冬田を雁の歩み哉
 千鳥啼いて榎吹き散る夕哉
 雪の戸に馬の尻を聞く夕哉
 凧や水途絶えたる石河原
 水仙に佗しき宿の油烟哉
 木葉焼いて岩洞に澄ます心哉
 竹なんと切りても見つゝ年の暮

安永四年

今朝の春我か新ら蓑の塵掃かむ
 春立つや里家はつれの馬の聲

日の透て井の水涼し若楓

沙鷗子角館へと聞え侍るに

君が留字身は鳥屋籠る鷹の情
 早苗守る芦火にあぶる徳利哉

赤沼

夏沼や蛇ゆくあとの消えもせず
 白壁や毛虫這ひゆく曦
 夕風に一筋涼し舟の道

ある人の野亭にて

衣を裂く音や新樹の雨のあし
 夏川や小石まばらの星の影
 雨晴や虎杖たけて軒暑し
 路丸最上へ行くを餞す

摘めよ〜末摘花の國わたり
 山風や螢更けゆく垣根川
 蓬焚いて女土搗く日暮哉
 瓜一つ手玉にありく野道哉
 桃一つ二つ落ちけり今朝の秋

風枝を折つて氷を碎く柳哉
 雨に聲なし氷柱の落つる音折り〜
 枯竹に虫陽炎ふる軒端かな
 春の夜のそれとも見えぬ電り
 津輕の吳江立ちながら一筋に別
 れて寒し春の水と云ひて出るに
 春の月物云ひ足らぬ別れかな
 萱場とかいへる處にて
 川中や獺鳴き歩行く朧月
 雷の中に聞きけり初蛙
 花未た下陰寒し鶴の尿
 山丸くなりゆく花の曇り哉
 鶴の胸に落花を疊む早瀬哉
 大塚にて
 細雨見れとも見えず櫻の携む夕哉
 平原や蒲公英生ふる水の中
 春の暮砧うつゝや夢なるや
 時鳥羽黒の杉の曇り哉

鳥一ついつくへ飛ぶや天の川

魂棚や蚊帳を隔つる古屏風

翁の碑を築きたる日

秋に破れず風に動かぬ芭蕉哉
 草の戸や月さし入りて誰もなし
 月の戸や訪ひ来る人を芋の蟲

鶴羽立紀行 十八句

いてや今宵笠の緒なはん千々の月
 馬のけよいかなる人の骨の露
 水海や何に染みてか鮒の秋
 砂垣の柳煙るや秋の風
 白濱や小鱗空の人曇
 瀧風に戦きて杉の露白し
 馬の背を吹き越ゆる波尾花の如し
 野分暗く鷗亂れて聲悲し
 明かたや鶉鳴きたつ右左り
 女郎花月入る岡の戦き哉
 黍垣や日陰に蟲の聲一つ

雨の中菌提けゆくおさめ哉
潤風や枝吹きあけて初紅葉
白岩の盈れて蜻蛉飛びにけり
離れかねて雨降る雲や秋の山
菊苔む宿とこそ知れ細格子
關の戸や夜すからの音は葉かも
稻掛けて菊静なる木蔭哉

宗家の花明御紋の羽織を頂戴し
て祿を得て難波へ登らるるを壽餞
して

梅苔む旅路に立つや冬霞
風や硫黄流るゝ石河原
親五器や氷をはかるさゞれ鮒

濁川

冬ざれや赤田の水の土油
冬川や片際過る水の音
雷や氷を砕く寒の雨
殿原の犬にひかるゝ櫓かな

鳥の糞地に音高し夏木立
下露や夏野分けゆく脛かゆし
露はせて竹の子涼し朝日影
澄む月や蚊帳を徹して竹の影
送り火や薄暮かたの人の影

題聞怨

金物の露に錆びゆく妻戸哉
夕月や龜這ひ歩行く小松原

男鹿宮島

名月や貝付並ぶ岩の際

同 孔雀窟

鳴り込むや岩屋の口の秋の風

同 山橋

岩橋や海へしたゝる月の露
捨舟や時雨の雨に盈れ糲
崎風や海吹き澄て鷹の聲
炭竈や煙からみてゆく時雨
夜神樂の鈴ふりそふる嵐哉

木兔の見れば見てをる夕哉

安永五年

七草やから火焚きたつ臺處
土升や梅の盛りの家工
四五本の柳の中や薄烟
野の末の月に雉子の頭哉
山鳩の啼きつる方や花辛夷
防風掘る濱の下りや朝しめり
主なげに落ち積りたる椿哉
馬に逢ひ牛に逢ひけり初櫻
猫の妻日半の目ざし哀れなり
若菰や風四五寸の水のうへ

北野

うなる等や太鼓に囃す春の馬
竹裏亭に笠廣く作れる燈籠あり
是に銘して
花に雪東坡と呼ばん石燈籠

冬川や風に吹かるゝ水車

安永六年

梅屈てすくなき花の白き哉

菅神奉納追加

老梅のかうくしさよ風の聲
春の夜を流るゝ船の鼓哉
淺沼にすくろの薄浮きよりぬ
矢橋のみやしるにて

鶯の林にあたる高音哉

山路

火をとへば山繭とりの宿り哉
辻店や誰か涙の古雛
郭公鳴くや焼場の火の明り
馬士の頭に結ぶ菖蒲かな
岸の竹露も雫も螢かな
誰かために女麻刈る月夜哉
稻妻の野草に沈む夜明哉

露の宿燈籠一つの明り哉
海更けて遠藻の蟲の鳴く音哉
紫苑よりあまりて蛇の鳴く音哉

七月十一日洪水

雲風や蜻蛉取り付く芦もなし
小鳴鳴く水ふむ道の夜明哉
合歡の實の枯れ古る風の岡邊哉
みなわ飛ぶ風の中鳴く千鳥哉

安永七年

山笹の雪突き落ちてかけろひぬ
山中や毛皮さけおく軒の梅
雉子鳴く風の野柏暮れにけり
薄芝や旭の水を吸ふ雉子
日の昏や犬に追るゝ雉子の聲
誰殿ぞ夜にまされ來る山櫻
象潟を牛に漕かばや春の潮
春の猫鳴くく橋を渡りゆく

川筋や火矢の過ぎたる夕涼
古川や芦根の月に鯉鳴く
淵の菊水玉越ゆる動き哉
寺深し山構へたる夕紅葉
茨の實や風によるめくさりくす
田の口やたなこ平目に落つる水
鶉鳴くや胡麻売よとむ垣根川
雲二分水三分の月夜かな
行秋や河原蓬のしらかれし

路丸江都より歸りたるに對して

武藏野の袖の草の實何々ぞ

中村吳來追悼

釜さめて忽ち月の影悲し
高岩や鶉の糞白く海寒し
十月の人等閑の月夜かな

翁忌興行

聞くべくば惟然か和讀冬の月
薪水の勞にかはらんとて

山路來て柳ほこるゝ流哉
本堂の先繪圖出來ぬ花盛
鶯の川越してゆく眞晝かな
浮鳥のあふのけに鳴くや春の川
牛道や泥にもふれず飛ぶ胡蝶
淺水や田螺かたよる日の旦
木雁禪師のもとに修學をなす居
□長老を思ふ

書記をして夜は又何を時鳥
海山に帆一つ白き四月かな
松笠を落としてゆくや閑古鳥
海に入りて目に限りなし五月川
茨の花叢ならぬ匂ひかな
泉に遊ぶ
手拭の流れて鮎の散る瀬哉
天蓼の花や山路の朝雫
立ちのけば鳥ねちよる清水哉
此頃の目を洗ひけり蓮の雨

笠給へ雪に着て鉢ひらかばや
胡桃炭己れ火吹いていと寂し
水仙や寒天に人堪るとき
剃るさへむつかしと髪うちまと
ひ侍るを稚きものゝ心にも鳥の
頭に似たるといへるを其儘に號
となして
毛衣に頭すくめて年暮れぬ

安永八年

からまりて犬もゆくらん若菜畑
玉たるゝ九輪の雪の雫哉
雁の聲雪雫して寝よかりき
水の日の柳に映る動き哉
出て見れば臙に雨の降る夜哉
高松や駝羽延ばす春の暮
何摘むぞ爰等の女とも見えず
繪に霞む家一つある野松哉

春めくや遠山煙ところく
春風に狂ふ人皆猿の顔
君來ねば梅白く唯月白し
菜の花や海少し見ゆる山の肩
草の戸に草の餅なし桃の花
花に響く誰や陶を落としけん
苗代やしつまる水に山の形
藪杭や花に蹴倒す寺境
春やゆく島山青く鳥幽か
安々と盛り夜に入る櫻哉
よき扇かざして通る卯月哉
時鳥雷遠くなる夜かな
水草や影に別れて飛ぶ螢

禪林にて

木々すべて枝たれ苔の露涼し
香ふりて竹に風聞かん簾
ひと夜くあらはになりぬ天の川
はつ風や浅き軒端に蝶螺焼く

八十七の母に對して

飯蛸の飯まゐらせん老の母
蝶遊ぶ静や雨の降りかゝり
初雲雀五寸の麥を登りけり
しみくと夜の花見や醫師達
鳥かへる雲のたるみや春の暮

簾外春寒賜錦袍

ありつきの奉公初めや梅に琴
初午や子供まかせの村の神
朝ぼらけ茶湯者通る櫻哉
更衣東坡か扇さいてけり
薄やうに物書く窓や若楓
人聲や新樹にこもる宮普譜
槻の木の股に棚かく涼み哉
照射する小田の手ひまや若い者
慈母榮敬卯月二十八日世を去り

玉ふ行年八十七歳

一息や西に飛ぶかけ時鳥

朝明や踊矢來の竹の露
稻妻に馬牽きゆくは親なしか
魂祭る土器繁し古き家
秋風や逆羽立ちたる鶯のさま
かたよるや夜風落ち來る小田の鷹
着る物も定まる秋に成りにけり
新しき小家も見えつ秋の雨
今年子の親鹿呼ぶや村芒
雨霞會式まじりの十夜哉
枯菜莢に取り付いて鳥の聲細し
夕暮や雪少しつゝ竹の節
池水や木葉沈みて魚靜

安永九年

流れ來て氷を碎く水哉
誰かために若菜摘むらん小傾城
月奇なり柳によれば梅によれば
牛かくす柳も春のしたれ哉

實兄祐從六月二十三日世を去り

玉ふ

夏杉の皮肉隔つや汗油
宜祥寺に埋葬

水無月や何と涼しき土の底
八里の秋 八句

目の前に八里の海や鴈遊ぶ
休みたる白に腰置く月見哉
稻妻に猶鈴蟲のすゝ音かな
山近う見ゆる日鷹の來初めつる
百挺の稻鎌別つ朝日哉
刈競ふ稻の匂ひや日和風
畔豆は早稻のいそぎに抜かれけり
先つ問はん籾の鮒の初紅葉
乳の毛を大事がるなり相撲取
凧や狼原をいつる月
捨てゝある蟲田の稻や片時雨
蘭學の看板白し初時雨

皮板に普譜をつゝむ時雨哉
袖か浦へと立ち出づる行脚に
鳴一つ時雨飛びぬく日影哉

天明元年

文臺やそれ相應の鏡餅
死んだかと思へば戻る男猫哉
どこてやら眉書かれたる女猫哉
上解の水に遊ぶ小鮒哉
綿弓や二月の雨の小家並
梅散るや風吹き廻はす縁の隅
寺内山より松多くひかせらるゝ
に
松につれて城へ曳かゝる菫哉
村口や蕎麥殻見えて残る雪
遠寺や西日に見ゆる花の中
夜の明けて見れば雨降る櫻哉
千々文臺の裏書

菊伏すや茶の木島の行きとまり
菊に僧烏帽子に交る九日哉
白菊の玉に動くや瀧のへり
老か秋夜の力や火打箱
葱の葉の僅に青し寒の雨
皮足袋のあかるゝ老や年の暮

天明二年

あさましや蟻に吞まるゝ蝶の羽
綿屑をほしげに春の雀哉
夕虹や入江のへりのむら柳
いはけなや物舐る子の雛祭
小町の彩畫を壁にかけ糸音を雙
べて歌ふ此興をうつし與へよと
ひたぶるに乞ふまゝあたふ
手枕や世を浮草の花心
もみ出す湯屋のあやめの匂ひ哉
五月雨や豆の生ひたる流し元

つさせぬやふたみの花の磯馴貝
一合の芥子や見渡す花盛
郭公貧乏耳をなくさめよ

芭蕉翁像畫之讚

涼しさや生涯は唯杖と笠

雄鹿紀行 九句

盆に香蓄を舐る旅出哉
涼しさに筆とる神の林哉
舟人の其青茅折れ稜せん
怪しくも涼し甘尋の杉風
峰薫る風や左右に海湖水
海打つて海松巻く瀧の渦青し
唐鳥の窟に浪の玉涼し
岩橋や蝶螺に馴るゝ蝸牛
とこふしの酢浸し涼し貝ながら

旅心止まざりければ

秋立やいつれの雲に杖つかむ
明月や水よき里の茶の匂ひ

秋立つや顔へかゝれる蜘蛛の糸
黍の葉の葉に葉削るや秋の風
水蒔きて林すゝかん天の川
今朝の露はゝき木白く成りにけり
月遁みやこのかたへと立ち出て
ゆくに

月見つゝ行くらん駒の牽き頭ぞ
名月や城あり寺ある田のあなた
よき馬を買うて酒呑む月見哉
あり體な咄聞き居る時雨哉
馬糞枯れて風しらけたり冬河原
たれ籠めて澁紙臭し冬籠

矢橋山王

神樂乙女小夜更けて聲のいと細し
水仙や夜はひめ置く箱の内
雪沓や日にむく軒の竿の先
年の底糠ぬるひ出玉子哉

天明三年

如月の霜や圃のあらおこし
 賤の子の餅草販く哀れなり
 吹きぬけて思ふ事なし籠枕
 五器挽くや秋立つ風の小行燈
 秋の野や果敢なき方に雨の降る
 鳴鳴くや芒交りの稗田つら
 七月晦日沙鷗菴追善の文臺を催
 して
 露の間も魂あらば來ませ草の菴
 九日大雨大雷
 神鳴に亂れぬ菊の光り哉
 大切に行きあたりたる夜寒哉
 秋暮王維を思ふ
 鹿飼うて盡さまほしや秋の情
 ひつち田や青葉折れ込む薄氷
 溜池に行燈洗ふ寒さかな

病中

曉にふみ出されたる湯婆哉

芭蕉忌二章

吹きたまれ木葉に書かん八百句
 此塚の帚に折らん枯尾花
 涸沼や穂葭折りさす道印
 冬川や日影よれゆく石の間
 青草や人里近き冬鳥
 瘦馬や冬夜寝かぬる鼻の音
 潔くて又淋しかりき水仙花
 松前に居せる二草か畫讃のぞみ
 けるに
 雪空や生海鼠竈屋の煙立つ
 から風や里離れゆく寒念佛
 行年や物にさはらぬ小脇指
 石原を走りかねてや鳴く千鳥

天明四年

梅と我れと年同うして我れ老いたり

天明五年

風暖く海苔たへたる岩間哉
 水ゆるく夕川柳したれたり
 水の上に城の浮きけり春の月
 盡く蛙鳴く夜や水臚
 橋守かうとき燈に寄る蛙哉
 山吹や重さなる花の諸したれ
 病中
 頭かゆく髭はものうし春の雨
 我が菴誰に賣らうよ青嵐
 鼠尾草の花咲き初めて物悲し
 女郎花むら雲影の野面哉
 鶉鳴く野は花ならぬ草もなし
 檀特や雲に笈置く岩の傍
 菊植えて花にかまはぬ栖哉
 徑路雷聲とどろき光りたばしる
 今や身を裂くか霞の紙合羽
 濡雪の臉に重し戻り馬
 柴雪舟に付いて山家を出てにけり

五明句稿

十三卷

四號附録

一九

草の戸の規模や初日の雉子の聲
 残雪や恐しげなる杳の跡
 雨寒し花喰ふ鳥の聲ばかり
 松山や虹の中より時鳥
 嵐雪が吟にぶしとて都に登りて
 舌をすましけるとぞ我れも濁聲
 を耻ぢて

鶉鴿の舌菖蒲の水にすかばや
 いか世を獨相樸の狂はしき
 今日月祇園にせばや新豆腐
 名月や木賊の末の露の數
 杖になる草を尋ねん秋の末
 寐所をさたむる雁の歩行き哉
 靨白の音ばかりなる秋の末
 蚊帳に風の入る夜より蟲の聲聞ゆ
 はさき實のすくなきや一盒子

刈跡の青草寒き田水哉
高藪や野寺見え透く冬の雨
我れに似し人を尋ねん年の暮
年柴も足るや林の落こぼれ
むしり食ふ馬や枯野の草の音

天明六年

人來るは世間も梅や咲きつらむ
日は山に盡きてしたる、柳かな

五十目神明奉納

疇塗るやあまねく照らす曠
草の戸とあなつりよるか鳴く水鶏
灌佛の光さしそふ青葉哉
このかみの七めぐりに宜祥寺な
る墓に香を捻して
白百合の頭たれけり塚の前
あちきなの白き西瓜や玉祭
遠かた人の訪ひ來りけるに

此春植を置きければ莖高く花咲
けるに

花咲いて根に待たれけり草の秋
初秋や尾鱗反りたる夕肴
みちのくの文貫古郷へかへると
いふに

焼米を噛みて越ゆらん九里の岨
雷鳴のあとに流れて銀漢
秋の暮垣根の蔓の薯掘らん
名月や隣は遠き畠座敷
海見えて尾花笠打つ雨烈し
稻扱よ前たれからん柿むかん
翁の碑に詣して

冬の日や木蔭わびしき塚の墨
ちよつほりと雪の閑や杭の先
山陰や出水に遊ぶ鴨二つ
撫てゝ見る顔の尖りや冬籠
小財布に五ッばかりや寒玉子

わび寐せよ蚊帳釣草の露の宿
雪洞に蠅の集る時雨かな
石垢に日の影寒き流かな
濡雪のわびしや槻の片面
木啄の柱に付くや冬の雨
雪の日や雉子遊ばせる豆の糶

天明七年

春風や木葉の下の溜り水
裏門は水も流れて柳かな
小奇麗な扶持取町の櫻哉
花盛り道たち切るや小侍
五月雨や里も畠も雲の中
夕顔に瓜むく月の涼しさよ
下總なる美丸玉斧去年の初冬小
夜の草扉を敲さける時琉球の種
なりとてアツフラといへる物頭
陀にかけてはるゝ持ち來りぬ

寒天や竿に吹かるゝ足袋木綿

元明八年

若菜賣幼き者を連れにけり
時鳥一段つゝや宇治拾遺
いとけなきに發句してよと姪な
るもの望みければいと丸う肥え
たるを膝に愛して

笑ふ顔見れば牡丹の荅哉
岸草の螢こぼるゝ四手かな
二ツ三ツ螢握りてこそばゆし
秋立や毛色定まる二才駒
稻妻や當つて消ゆる標澄
日向あり蔭ありて芭蕉静なり
旅の半に長き髪薙きて行末多く
の國わたりせんといへる京里遊
の尼前に申す

花散つて男になりぬ女郎花

八十二とか聞えける素大か祖母
身まかりけるに申遣す

花薄白髪の人 行方哉
今年此秋菊見て中の八日このか
みを祐忠さみのはたとせあまり
三めぐりのいとなみある靈前に
頓首して

ふるや秋霜に蛙の生甲斐か
月籠る雲の端寒さ光り哉
草の穂や雪にも折れず二三本
年の奥鹿角曆をまたれけり

寛政元年

青柳に笠着て雨を踏む子哉
梅の露目弾するや日の光り
花残る鶯の巢の静なり
五月雨や山見ゆる日を郭公
簞目覺めて見れば誰も居ず

月涼し角に露持つ 蝸牛

奥の黒石木鷗彌生二十八日身ま
かりけると來翁の消息に聞えけ
れば世に櫻の一章をしみて

寺内奉納追加

病葉のさればや散るも風なき日
御千度の數取り遣らん櫻の實
更衣いとや老の前下り
知梁象潟袖か浦わたりして再び
草菴とひければ

片釣の袖は小貝か夏衣
よし切のよしなき口や郭公
蓼の螢 五句

木の中の螢洗はん水はしき
螢待つけしきや唐の團扇持
をさな子や螢に潛る馬の股
藪際や大粒雨に飛ぶ螢
木の極や足も濡さず螢狩

初秋や坊主交りの遊山船
美人の畫
羅に初露かゝる姿かな
紙秋のかへらるゝに
鶉立つあとは一穂の薄かな
雨寒き山の崩れや薯の折れ

寛政二年

四隣田家なれば

七草の屑かい遣らん馬の粥
蛙夜たゝ鳴くや山火の遠明り
加琴の登らるゝに
上紺の天氣となりぬ初櫻
掃きよせて淋しさ見せん花の塵
玄鳥の顔搔く肩の尖り哉
乙鳥や手繰り渡しの綱の上
鎬たつ露や五尺のあやめ草
小くて涼しき瓶の蓮かな

芭蕉葉に畑物盛らん星祭
願れば却て白し花芒
朝顔の白きは尼の姿哉
麥黒く底澄む秋の水寒し
砂原に芭蕉を書いて月見かな
攝待や袴着て居る相撲取
樞鳥の又榎をもあらしけり
行秋や朝々毎に蠅の骸
柘榴うし物喰ひこぼす老や是
かへるさ又鶯々舎に入る

近付の柱によるや秋の暮
永源院の墓にて

父母の我れを撫つるか枯芒
姪なるものゝ文こせしかへり事
に道すからを題して

ほの赤き鶴の頭や枯芒
山王のみやしるにて
寶鐸の音からびけり冬木立

寺内村にて
權鉢の中に淋しき木葉哉

古四王宮にて

宮めくる人の袂や幾時雨

五輪塚

草山のむしれて寒し海手風

金比羅にて

鼻先をつまむばかりの寒哉

下窓や冬傾城の針仕事

縁にしのものに逢うて

頭巾脱かじ脱かば白髪の憂や見ん

冬の夜や物音絶えて鐵漿の臭さ

霏るゝや吹輪祭の竹もかり

降るや木葉降るや時雨の翁塚

寐支度の音の寒さや灰篩

鮫食ふとさかなく人の申しけり

佛仙追悼

誰に濡れ誰に氷るや我が睫

らんとするを

日にとめよ青田ゝも渴の數

草の戸は去らでもすめり鶺鴒の舌

鹿島の俄練を眺めて

なま中に素顔をかしや神持

閑古鳥姿見ゆれば猶淋し

楮むく人と咄して納涼哉

涼しさに死ぬ稽古せん一枕

正當は文月なる此卯月□□□て

いとなみけるたらちめの十あま

り三の法筵にかしこまりて

秋を根にうゝるや芋も法の種

茶立蟲心に秋の立つ日哉

東館の君雅名をつかせられ給ふ

に祝して

秋澄むや鶴の聲ある阜の松

老が秋靈芝を摩姑の手にやせん

祝はるゝ身も刺鯖の鹽さびぬ

丸墨も下弦になりぬ年の暮
方たかひする人床し年の暮

某のもとより鹿角曆送りこせし

を渭虹持ち來たり此曆見る人妻

を迎へたるを聞て

水祝ふ桶飴して春待つや

寛政三年

二日立春

君が春豆にためらふ鬼もなし

七草や大戸を明る咳拂

狂ひ來て梅を散らすな雀ども

初鱒や柳はたるゝ梅は咲く

山吹は水につくまで咲きにけり

卯月晦日洛の重厚江戸の宗讚明

石の瓜坊訪ひ來りけるに

しのびやかに見えてゆかしや夏の鴈

送別 重厚宗讚瓜坊(象渴に至

遠淺や鳴のすり飛ぶ夕明り

しらゝと草の枯穂や日の斜

割串に鬼灯皺む時雨哉

宜祥寺 二句

杉の葉を積み込む寺の時雨哉

青々と乳金寒し寺の門

ぢつとして居れば明るし冬籠

人の來ぬ冬の夕や火吹玉

都邊の人八龍湖見來り猶一國の

行程を尋ねければ

我が國の瓜や氷の八龍湖

引込て居るや師走の人形筆

人の贈りければ

澁なしの榧にも似よや老の暮

寛政四年

菜や摘まん梅折り入れん手籠哉

燕の美人を招く柳かな

來翁遷化聞えければ

窓に來し蝶さはそれは係か

美丸追悼之吟

玉を石に打つやうつゝの春の暮
澤露や人ゆくあとのゆれ残る
昔くほとは菖蒲持ちけり井の邊
晝顔の花は眉なき女かな
足のある膳は誰々玉祭
雨されの野末明りや鳴く鶉
秋の山錐て書いたる姿かな
宿世いかに斯くもかゝる漆の木
木枯の吹き透く蟲の袋かな
金鷄も鴛鴦も夢紙衾
花活の口明いて居る寒かな
奴僕あじろの沓作りてすゝめけ
るに也身庵が贈りける花陽巾を
いたゞきて
仙人の着る物買はん年の市

寛政五年

初櫻木隠れて恨む風情あり
捨てられて徹書記想ふ花見かな
初櫻淵に時つ思ひせり
元日のすさみに曆讀みにけり
葩煎つけて這ひ廻はす子や花の顔
更衣人かましとや人の見ん
物を食むやうすも見えず閑古鳥
草の戸をさびやかしけり行々子
蚤ふせぐ菖蒲の筵造らばや
帶川樓二章
涼しさは庭に鮎見る流かな
飛ぶ螢夜に入る琴の塵かとも
渭虹亭
秋立て萩も咲きけり二日程
見え透くや聖靈棚の簀の一重
あばたなる女の男もちたる其隣

家の顔よきかいた嫁せずと茶

呑み合ひてはなし侍る折りふし

扇書いてよといふに

山椒は鐵漿をつけるに女郎花

日暮秋風起

秋汐や鷗かたよる草の月

觀滑川

去年の春は此川上に遊びて十二
所の人々に面を合はせ今年の秋
は此川下に漂泊して能津の人々
に心を結ぶ行水の暫も止まらざ
る事を爰に驚き臂杖を押し當て
唯老眼をしばたゝくのみ
海近き日の悲しさや秋の川
留別
花を見てゆくや命の藥草

金光寺野を過て

昨日は夜廓に紅顔を見今日は原

五明句稿

野に馬骨をふむ水となり山とな

る旅行の變化手をかへすが如し

手の平に物書ききつゝも行や秋

京へ申遣す

秋の名残何と梢の天狗達

八月朔日能津のゆたかなるを

渡り來て鶴頸延ばすたのも哉

初時雨白き蒲の穂ぞ淋しと翠羽

が申こせしにその方へゆくとして

終にゆく道は是かよ枯すゝき

老悲し雪野の馬の松を嚙む

芦火吹く顔の見えけり網代守

京の町に河豚喰ふ人を指折りぬ

うかれ女や師走は誰に靠る

火とほして机の上も師走哉

あかうせよ春を待夜の有あかし

芭蕉翁百回忌

刈蕎麥の眞まことの新を捧げばや

寛政六年

我が頭白魚多く喰ひしにや
我が庵の梅の遅きに灸せん
鶯に薫たかん石の上
火桶抱いて二月の梢見るわびし
若菜摘む今日はなやきを鳥部山
江戸の町に賣らぬ物かよ葦草
春の鱈佛の寐たるかたち哉
我が茶釜涅槃なりとて鳴くやらん

美人弄紙鳶

御秘藏を人に見するや紙鳶
初櫻鍋の鑄かけに伴れ立ちぬ
草の戸の留守に鳴き居る蛙かな
眼を明けば花を衾に着ぬる哉
闇を拂ふ花の下居や素蠟燭
あなせはし世間の櫻我が櫻
わびしらや春盡くれとも古茶燉

いさましやかかけ帷子も馬盡し

僧珠阿へ

草の戸は唯晒井の水一つ
水無月二十八日 主竹追悼
力なや竹は倒れて夕顔の

御風を柴渡の川邊に送りて

なこしせん我髪あれば幣をとる
草暑し醫師なき里の水あたり
杜若座敷に水をうたせけり
身生山七回奉納

杉の香や雲より上の郭公
涼しさは硯一つの遊びかな
秋の立つ草の穂一穂一穂哉
稻妻や浅妻船は柳蔭
稻妻や日暮里遠しむら芒
甲州かゞみなる一雨坊に
天の川富士の前かな後かな
亡き人の枕に通ひければ

五明句稿

十三卷 四號附録

二九

雉子の聲あざやかにしてうらさびぬ
春の夜や心の限に戀作る
醉し脛水寒からず春の月
春の海跡に貝のこそはゆし
山越や炬に雉子の亂れ聲
草の戸や灸する夜に蛙鳴く
青き山浅黄の山や時鳥
鼠こそ油はねぶれ時鳥
灌佛や木の間をもるゝ曠
鳥追ふ石を牡丹に誤りぬ
輪藏に蝶眠り居る若葉哉
五月雨や庵の柱に錢二百
晝凄き鶉飼が宿の軒かな
野鳥やかりきさす香の日和風
取り出して煩はしさよ蟲拂
若き人に簾下げたる納涼かな
瓜作り鳥にこぼす涙かな
二泉子男子まうけしに

夢人や切籠の裾のなき姿
相撲取の長き羽織や墓參
文月や雨の中より秋の風
竹の實のあからむ垣や秋の雨
鶉鳴くむかし戀せしあたり哉
夕雁を見れば我が田の邊りかな
楨の木や松に見し其後の月
稻舟や寺よりいづる獅子廻し
羽織着て肴屋來たり散柳
秋窓一樽送りけれとも春鴻葛三
ともに盃をわする

菊幕ぬ小樽の口も動かさず
なまふくへ叩けば答ふ風情あり
僧につれて行く日は鶉聞きにけり
春鴻葛三八月二十三日來たる九月十二日別る春鴻は我れに二つ
弟なれば互に別れの情は述べま
しきぞとて出てけるをひそかに

後影を眺めやりて

稻刈にまぎれて笠も見えずなりぬ
 秋もはや柚味嗜しみたる時雨かな
 行秋を豆腐あぶりて惜みけり
 洛外の藪のけしきや高燈籠
 二日ばかり失せて又來ぬ秋の蠅
 維摩忌や我れも毛皮を敷き初めん
 老が齒に蝟はてしなき寒かな
 林は凧にやつれ垣根の小田は霜
 置きわたしてそぞろ寒かりける
 程都なる甫尺騷人の過訪をなく
 さめかねて

寢覺むらん木の葉の時雨鳴の聲
 浦里やよき家見ええて冬木立
 川掘の立ならひたる時雨かな
 雁鳴や一雪消えし田の稽
 まさくと我れに月さす枯野哉
 浦さひぬ有るかなさかの冬鰯

稗を食ふ故郷へ來たよ角力取
 ある法師相撲と友寢樂しめり
 木萩立つ山田静けし夕雀
 雲切れや野菜莢はなれて鵲の鳴く
 水音や薄夕澄む山の峽
 さしのひて雁呼ぶ雁や青稽
 馬鹿鳥鳴くや芦の穂出しの濱嵐
 夜刈する田子に酒遣る月見かな
 五味子もきてはつく喰へば風を吹く
 菊を好く女俳諧の句もすなり
 螻蛄鳴くや人來ぬ菊に月のさす
 山根經て行く水長しむら紅葉
 いやすかれと縊る枕や今年糖
 終夜無夜庵か歸錫を思ふ
 嗚呼月は鳥海の陰になりゆくや
 國造碑摺本を得て
 石の霜千歳の秋の匂ひかな
 水蛸の五尺にあまる寒かな

年の暮定家の色紙二度見たり

寛政七年

文を遣はすとて

はやる物は何ぞと江戸の初霞
 猿曳か寝たよ酔たよ柳蔭
 やとかりに蜆さやく柳蔭
 花や散る顔こそはゆき薄月夜
 春風や小鷹すゑたる御曹司
 日は斜躑躅食ふ子等家は何處
 法興寺にて
 夏の山つぶり剃る音さやかなり

萬固山

若葉もる日の静さよ儻多羅僧
 蝸牛竹をたわめて冷しいか
 秋立や鬘鬘にうつる樹のそよき
 朝顔に雨さと降りて淺黄空
 鯛の鳴かずなりしが鳴く悲し

小夜千鳥小篠の雪かよる波か
 枯原やそれとおぼしき道は水
 又の日は雨亂れ降りて雪悲し
 紅や殊に枯野の鷹の繳緒
 蒸玉子なすことなけの櫓火かな
 餅花や子は幾人もあらまほし

寛政八年

あらたまる春の物には素土器
 蝶につれて行きつゝ見れば小町塚
 春風や町家へ這入る迷ひ鹿
 初海苔の柴にかゝるか薄月夜
 桃柳馬鳴く家も節句かな
 乙鳥よそこは貴人の這入口
 喪中

紙衾寢覺煙草もむつかしや
 世は富めりされは萬戸の餅の音

寛政九年

五貢句帖序

蟲に目を整されはしすな月の秋

寛政十年

可來句帖序

蝶とぬる草の枕よ風引くな

寛政八年より十年まで、此間年次詳にするを得ず

繭玉や柳したれて星月夜

春風や高脛白き力持

我れ見えて人や立ちけん春の月

風鎮に梅を洩る日の光りかな

誰殿の葬禮なるそ梅の月

田の中に鳥居立たる柳かな

白賣と共にやすらふ柳かな

青樓半醉曲

み奉りて

春日かけ氣高き墨の光り哉

三合にして止ぬへし鶏合

梅白く吹きすむ風の日暮かな

野わたりや柳かぶつて家一つ

隠れかねて草麥寒し夕鶉

住めば都雛のおものに田螺盛る

山吹や主じを見れば鉢叩

白魚や至れば青き海の色

山苜の花こぼるゝぞ時鳥

水々し水鶏鳴く夜の星の空

槻の木や夕日に蟬の横歩行

知梁か一子扇鶴尋ね来り一日二

日ありて歸るといへば

早乙女に泥なぬられを道すから

早乙女よ生れかへらは妻にせん

鎌さげし男に問へは葛の花

鶯の腹見せて飛ぶ四月かな

五明句稿

十三卷

四號附錄

三三

引けは來る放せは外れる柳哉

鶯々舎のほとりにありといへは

人に尋ねけるにこそん柳といふ

よし

田螺もむ女つくはふ柳かな

白魚もしらす我か菜はたけて行く

火を焼くにかゝれば是も董かな

寶塔翁の碑前にて

花摘て董に塚の文字染めん

山を焼く夜頃ひたゆく雁の聲

干獨活の香に寢覺めけり夜の雨

山中や朽木の水に鳴く蛙

蓋とれば蝶の出つるや般若櫃

蟻の出る櫻の穴に酒つかん

うかれ女の讚

梨の花けはぬ顔の夜明かな

御守の書かゝせ玉ふ弓矢神の壁

軸を序よく拜めよと仰あるに拜

小町讚

紫陽花や七度めには茶色なり

蚊遣燃えて在原の君や顔隠す

我に向て何用あるそ蝸牛

居を市中に卜して

水瓶やひそかにさして月涼し

星合の影や木綿の川ざらし

稻妻やいと乾ける石河原

素鞆を著る人はいくたり村芒

馬て來るは赤き法師やむら尾花

海豊年とていと賑はし

名月や網にひきたる二萬兩

神田より土崎に行くとして

行秋や眞菅赤らむ馬蹄溲

高燈籠名残なる夜に雨の降る

老か秋席をふさける火鉢かな

産物をこととする梅村何某扇望

みければ

君か秋木の實草の實こぼるゝや
 騎馬祭秋の錦の魁か
 秋風や人の呉れたる祇園串
 狼の聲離れたる砧かな
 さらず汁秋も時雨となりけり
 蓑蟲のみのもすくなし初時雨
 青柴の垣くろみゆく時雨かな
 大根の肩ぬき出して雨寒し
 召し出たされて

結構な料理いたゝく寒さかな
 岸草を引はつて居る氷かな
 傾城の紺の合羽や冬構
 薫を恒なる人や冬こもり
 寶塔寺にて

下駄の齒に松毬かろし冬の風
 全良寺にて
 いか僧菽殻かけし冬櫻
 屏風立てゝ居るや蘇鐵の冬くらし

水は隴家際に鳴の鳴き寄るや
 山櫻飯焚き習ふ面白し
 山吹や此一里は水がらか
 永き日も西になりたる雲雀かな
 桐の花遊行の閉居訪はん哉
 木隠れや花橋の女繪師
 卯月十五日東館へ出てけるに鶴
 はなしたると御庭見よなんと仰
 ありければ
 羽をあふつ鶴に牡丹の匂ひ哉
 罌粟の花物の見事に散りにけり
 雨そよく眞菅の中や水鶏鳴く
 借り蚊帳の短き足にふし佗ぬ
 岩藤や岩魚を掴む花のかけ
 岡崎や吉田につゝく夏大根
 宮川や幣立ちならぶ青嵐
 犬二つ添うてゆくなり早苗船
 紫陽花や木かくれて水のよき舎り

山本や雪の旦のけむり出し
 爐開や壁にかけたる親の像
 鳴さかはす千鳥や小夜の舟鼠

寛政十一年

難波なる長齋のうし住の江の姫
 松ちくりこしければ

住よしの松葉くゆらせん初竈
 梅咲きぬ釜の高烹そぐるなる
 年古るき梅あり秣積める家
 春風や長さもの著て蚤乙女
 米搗の髪も光るや春の風
 雉子鳴く茶山の雪もかけろひぬ
 人のちくりける其夜

鳴け蛙草の戸らしく住みなさん
 舟は出つる渡口の柳梅の花
 此あたり知る人ほしき柳かな
 初午や爰らの里は田螺取

五月十二日永源院なる父祖の墓

へまわりて

怠りや塚の夏草膝を過く
 おもふ人の見えてや落ちぬ競馬
 其妻其娘と供してこのかみの塚
 に詣して泉の宜祥寺にのぼる

石の香や我が呼吸のみ夏の山
 のさくくと犬の來にけり星祭
 鶉飛ぶ横日に赤き草穂かな
 女郎花折れば雨降る野癖かな
 花薄風か吹かねば淋しいか
 干瓢も仕舞うた里や砧打つ

笠は三年の霜にさらし杖は山野
 の露に瘦せたり人の知りたる人
 々に面を合はせ數の卷々を一籠
 に收めて此文月の頃立ち歸りた
 るは五貢か生涯の望たんぬべき
 か

骨に知り身に知りつらん秋の味

翁忌

連歌にはかまはぬ味や納豆汁

塚へ詣して

海川や凧空を吹きすます
飼熊の柱を抱く時雨かな
今日も亦大根臭し冬籠
ころげ来る木の葉よ我れに物いへか
葱の香は未だ寐ぬ家か雪の月
菊枯れて京へ出らるゝ夫婦かな
雪晴やことく見えて嶽暮るゝ
木葉巻く藤より出つる兎かな
寒鴨や我足長くして寒し
住まば都ちんまりとして冬籠

寛政十二年

かく申す我れは七十梅笑へ
誰殿へさはかたけ行く山吹ぞ

京中の小袖はいくら女七夕
草の穂に長き短き蟲の聲
蜻蛉や秋に生れて羽の薄き
日の暮やこぞりて見ゆる女郎花

月下對僧

蓮の實か月見つゝあれは水の音
渡り來て鶴も田のもの祝ひ哉
鳴たつや雨にかしかる芋莖畑
稻妻や川添里は小家勝
名月に得たりかしこし川鱸
菊提けて道々見るや小提灯
嗔聲や野分止む夜のさりくす
紙衣著てかみこ臭いといはれまし
掃除して誰を待つらん初時雨
思ひよらぬ物貰ひけり冬籠
雪消えて青草淋し冬の雨
千鳥鳴く小雨曇りや大根船
山の座主櫓をかしく履かれたり

如月や蛙の鳴かぬ水もなし
散る花をいかに蛙の空目かな

驗者

あなあさまし蛙の聲を封じけり
幸若と申に逢ひぬ初櫻
鷄合御庭の櫻咲きにけり
何處となく野を焼く匂ひ腹へりぬ

花の雲集序

江戸の春花は成美か道彦か
今日は何の日なるを蟻のひたゝ飛ぶ

越中沙麥をとめて

草の戸のむぞふさ見よや刈葱汁
鶉に出ねば妻を遣ふや小夏酒

全良寺

闇作る木下静けし白つゝじ
六月や先つ寺かよしざれ繪よし

溽暑にかされて後

秋立や唐の料理も食うて見ん

人か松かあらぬか雪の山の上
付木突音こそはすれ夜の雪
物ほしう來て鳴く雪の雀かな
雲晴や城の灯影の十ばかり
からすみや獨時雨るゝなぞへ切り
一人二人扇遣ひや冬歌舞妓
雲欄の疊にすわる寒かな
日の暮や小雪のかゝる梵論の袈裟
大年や机は神にかし申し

享和元年

梅咲きぬ御顔てらつく撫佛
狼の息かゝる野に葦かな
うたゝ寐や繭玉落つる夜の雨
如月やよばれて歩行く京登
花に月明いたる口にぼた餅か
蒸梨も正月ものゝ餘りかな
船橋や大名衆を待つ柳

桃の花桃より赤し、傀儡師
馬入れて入江めぐらん杜若
夕顔に水打てば月の出てにけり
引けば来る尊に添うて月涼し
雲の峰さればよ熊野八庄司
うかれてふものゝ扇書いてと申
ければ

宵々やいかなる人を稻の殿
世を去る人は日毎にあれと我か
しれる人の一人二人身まかりし
と聞くぞ胸とろかすばかりな
り

稻妻の眉に燃え付く思ひ哉
稻妻の届かぬ山やとゝく山
芭蕉たれて稻妻遠くする夜哉
聖靈に別れて蠅も淋しいか

花館神明奉納

八束穂を舞の乙女がかざし哉

可來へいたみ申とて

寐られまじ寐ずば秋の夜いかばかり
秋盡る日の影寒し雲に鳥

長翠か筆を走らす傍にありて身
のほどを申す

秋の蠅墨をむさぼる心なし
有明の露甜り合ふ小鹿かな
月凄き汐や落葉の逆流れ
清水田や青草見ゆる雪の中
傾城の親にも逢ひぬ年の暮
松見れば師走ともなき月夜哉

享和二年

七草や三草ばかりは庵の畑
鶯に寺の料理を食ひにけり

源氏の晝に

梅の露笛をとほすやうつし人
駕の戸を明るところに柳かな

南部へ

いつの水に里は流れて鶉鳴く
着て立ては鶉に似たる小蓑かな
露ふるふ顔の小さき鶉かな
寐覺く薫たくや秋の雨
鶉寒し穂切のあとの粟畑
蟾折りく鳴いて暮るゝや秋の山
月高し城は霧添ふ雁の聲
蜻蛉の壘すりゆく秋暑し
恨むらくは萩の主の琴彈かず
姿まをさば女の歌や秋海棠
日にたれて露々しさよ秋海棠
名月や鐘かけ松の目にうかぶ
我が菊は我が書く菊に似たる哉
はつたりと机を叩く夜寒かな
菊月十日可來か母身まかりける
に
昨日ありて菊は十日の佛かな

燕の顔かく雨のいとまかな
蕨掘る親呼び立つる日暮かな
夜の雉子嫁入の炬に鳴くやらん
初櫻あるじは田打つ男かな
明ぼのや旅はよき馬初櫻
月落ちて風眉を吹くや梅の蔭
柳たれて湖水朦朧たり雁の聲
山吹や田螺食はさぬ處神
涅槃會やされば抜けたる齒一枚
行春や何をとらへて惜しむべき
都見し人の來りければ

兎に角に京の事なり更衣
孕鹿日たけて起る哀なり
後夜の頃帯刀の人に逢ひければ
夜歩行は八幡殿か時鳥
鎌音のさやかに聞ゆ菖蒲草
あた花か雨に流るゝ瓜畑
刈藻する里の夜泊蚊帳もなし

膝なりにふくれてわびし夏衣
行暮て天蓼の花手折りけり
長木澤の山蔭を紙にうつしたる
に讚のぞむに

青臭き雨や阜月の馬合羽
螢見て蚊帳へ這入ればいね安し
手によきて行く野果なき薄哉
衣うちく隣の富も羨まざ
鶏頭の平たくなるや秋の霜
鶏頭や鳥仕舞の小酒盛り
穂に出て、海の際まで薄かな

追悼

齒に似たる柘榴を見るも涙哉
あちきなき墨の砂かな夜寒哉
毛皮着て唄うたふ見よ漆搔
木にとまる宮島こぞる時雨哉
時雨るゝや僅に青き鹽蕨
一俵の米時雨るゝや上り口

梅咲きぬ髭を剃らうや延ばさうや

亂舞の人にあうて

笛吹いて蝶よする人奇なる哉
春雨や虱鮫鯨安房鱈
卯月野に撞鐘運ぶ響き哉
此里や廻れば一里花かつみ
萍の花とり付いて脛かゆし
客をとめて

友寝せん胡桃ひしをの馴るゝまで
鶉遣の妻は蚊に寝ぬ破戸かな
螢火や嵯峨の川風竹に聞く
初秋やこぞりて通る能役者
天の川住むものならば鮎ならめ
名月や蓼の類ひも花の露

拾遺

雲寒し五日過ぎたる幟竿
稻妻は誰待つ船ぞ玉簾

やゝもすれば猿來て跨く火桶哉
馬好の僧乗り歩行く枯野哉
時雨るゝや頭ならべて都圖繪
けんば梨子降るや時雨の社口
海風や雪草株にしかみ付く
鬼北や千鳥を雨と吹きとばす
冬川や鍋墨ひそむ石の隙
霜風や横に裂かるゝ紙合羽
氷るかよ乗鳥湖邊鳴きわたる
鴨鳴くや江田一面の水の月
幾日明けぬ細戸や積る濡木葉
孤ッ千鳥翅を病むか脛病むか
むら千鳥今の霞にうたれずや
田の中の石に友なき千鳥かな
夜を晝になす玉見せん師走人

享和三年

元日や一列通る雁の聲

七夕や團扇かあれば書汚す

五明小傳

秋風

五明、初め鼠何と云へり、吉川宗七郎也。少時庄九郎と稱へき。名は兄之、字は了阿、那波三郎右衛門祐祥の五男、母は關戸氏、享保十六年久保田茶町菊の丁の邸に生る。長じて吉川惣右衛門宗順の養子となれり。宗順配するに長女律女を以てし、別に一家をなさしむ。那波氏は京都の富家、祐祥に至り秋田に移住したる家柄にして、吉川氏は城下に於て指を屈すべき豪商なりしなり。

五明、少年の時より俳句を好み、談林、美濃に出入せしが、二十歳の頃猿蓑を讀みて芭蕉風の骨法を自得し、それより精進勇猛遂に秋田俳壇の先輩となれり。五明以前の俳句に於ける秋田の地位は大甚低くかりき。芭蕉が象潟にまで來りて、象潟より廿里を距る秋田に筈

を向けざるにても知らるべきなり。五明の詩才は安永に入りてより頓に自在となり、年を追うて圓熟せり。

天明二年五十二歳にして、秋城の西南岩野樟岡に隠栖し、小夜菴と號す。之より俳に専なること一層なり。

享和三年八月、痢病を患ふるや、其起たざるを知り、湯藥を斥け、十月二十六日の曉に卒す。年を享くる七十三。遺骨を城西八橋村歸命寺境内宗家吉川氏の骨塔に收む。

風貌は總髮にして、面長に、體骨や、高く、長身にして肉あり。(肖像に依り推定)

旅行はあまりなかりしも、明和以前、關西に赴き、又安永年間にも至れる如し。尤も藩用を帯びたりしと覺ゆ。秋田領は太抵足跡を印せざるなく、弘前、酒田、越後地方にも足を入れたり。

天明の頃より門下に遊ぶもの多く、寛政に及びては五百人にあまれりと云ふ。

諸國の俳人とは大抵文通音信せり。蕪村の『春の海終日のたり〜哉』を須磨眺望の句にあらずやと云ひ

たるは四月二十九日夜なり。最初の豫定には、小吏となり居る身分なる故、晝は着手し難ければ毎夜五枚位づゝ書き、四月五日頃迄に完結せしめんとの心組なりしが、持病の頭痛といろ〜の用向等にて遂に延引、五十日餘を費すに至れり。

○前文はなくても意味の通ずる句には略し、又紀行文の如きは全く除くことせり。

○五明の連句をも添へんかと思ひしが、餘り長びく故後廻しすることせり。

○参考にもと五明小傳を附したり。(明治四十一年五月一日)

附記

露 月

五明は多作家であつたと見える。中年の頃、以前作つた發句三萬句を殘らず棄てたといふ事も傳へられて居る。それより七十三までの三十四年間の作も蓋し萬を以て數ふべきであらう。其中柳雨の集めた句は約三

送り、又成美と、自己の春の月の句に就いて議論せるなど物の本に書き残れり。

被襟舎、一方菴、了閑亭、鶴頭、蟲二房、紙洞仙等の諸號を有す。

著書の重なるものは、自家の句を集めたるものには、塵壺、句藻、俳論には、小夜話、蓼の螢。自他の連俳及び俳句を以てなれるは、初秋、夕月夜、田打猿、黃舌、初鴈金、梅の塵、霜の聲、秋の花等にして、又紀行文には、鶴羽立紀行、雄鹿紀行、八里の秋等あり。

其一族亦皆俳句にたつさはり、就中子春朝、孫宜大は、彼れを辱めざる技量を有するもの、如し。

五明句稿謄寫に就いて數言

秋 風

○五明句稿は亡父柳雨の蒐集せるものより謄寫したるものなり。紙數百八十八枚。此句數二千八百二十五句。但しもれたるもの他にいくらかもあるべし。

○謄寫に着手したるは三月八日夜よりにして、終はり

千。三千の中から自分が更に千餘句を選抜したのが本句稿である。自分が出來得る限り考へても解せなかつた句と、あまりに平凡だと思つた句と、月並だと思つた句とを去つたのが此一千餘句である。前書きに價値のある句は多少意に滿たぬをも取つた。不可解の句の中には筆者の誤寫もあらうと思ふ。

五明曰、金銀珠玉といふとも我物ならぬは其益なし又強ひて人の句形をうつしたらんは役者物真似に等しかるべし時に應じ折にふれて喜も悲もせめ。と。五明には師承する所が無かつた。又曰、上手と下手とは人の修行又生質にもよるべし。と。五明には天分があつて且つ修行があつた。又曰、予の俳諧は生涯の心を慰むる迄なり、人に花實のあらざれば禽獸に等し云々。と。五明の態度はこれでわかる。

三句に一句の比て選抜した此一千句は、五明の句生涯を判斷すべき唯一の資料である。五明が幾十年の句生涯は一卷の句稿と縮まつて自分の机上に置かれたのである。冬夜、燈下に屹々として巻中に朱圈を下す自

分の背後には、師承なく、天分と修業とあつて、一生俳諧を樂むだ鶴頭老人が覗いて居られるやうな心地がしたが、老人が笑を含まれたか、眉をひそめられたか、若年ものゝ自分には振返り見る勇氣が無いのであつた。(明治四十二年十一月三十日)



